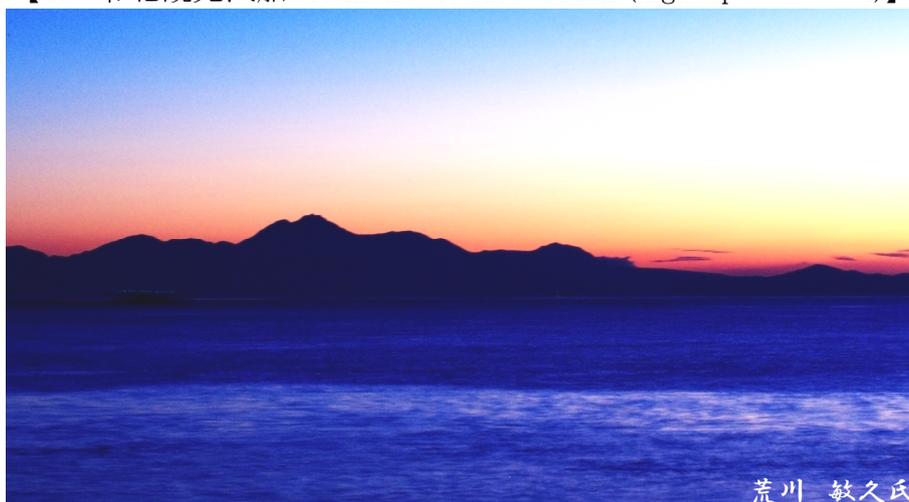


【11 苓北観光汽船 Reihoku Kanko Kisen (high-speed vessel)】



茂木港南方の川原大池付近から(橘湾越しに)

苓北観光汽船では、茂木港～富岡港の航路上のあらゆる区間で“[西面～南西面の雲仙岳](#)”が眺望できます。航路上では雲仙岳の方角が刻々と変化し、見え方が変わっていくことが魅力で、海上から眺望できる西面の雲仙岳は本航路ならではの風景です。富岡半島は雲仙天草国立公園に指定され、本公園のテーマである“[水陸の大展望](#)”が汽船から楽しめます。

汽船が富岡港沖で横断する早崎瀬戸は、有明海の水の出入口に当たるため、潮の干満の度に早い潮流が発生し、日本三大潮流に数えられています。この潮流によってプランクトンが多く発生し、魚類が集まるため、それを狙うミナミハンドウイルカが定住しており、イルカ越しの雲仙岳(↓)が航路から見えることもあります。

雲仙岳の山岳宗教は、701年に僧・行基によって開かれたとされますが、行基は初め天草方面から雲仙岳を眺望し、“あそこで修行をしよう”と決意して島原半島に向かったと言われていました。その後、中世の時代には両地域ではキリスト教の布教が進み、キリシタン大名のもと、南蛮貿易で繁栄しました。1563年にイエズス会のルイス・アルメイダが口之津に入って島原半島での布教を開始し、1566年には天草に入って布教を行い、1567年には長崎でも布教を開始し、その後、生涯天草で布教を続けました。しかし、豊臣秀吉・徳川家康によるキリスト教禁教以降、領主の交代も相まって、厳しい信徒弾圧や過酷な徴税によって領民の不満が高まって行き、有名な“島原・天草一揆”へと突き進みました。その際の激戦地である富岡城は、当時の状況をしのばせています。

このような歴史の香り漂う当地の風景は、文化人に注目されるようになり、江戸後期に九州を旅した多才な知識人・頼山陽(漢学者、歴史・文学・美術など多方面で活躍)は、茂木港から乗船し、途中で嵐に遭いながらも富岡付近に到達し、名作“雲か山か”の漢詩を詠んでいます。この漢詩は、荒々しい天草灘と富岡城、そして背景に雲仙岳が見渡せる風景を歌ったものとされ、イルカであろう“大魚”も登場します。また、明治40年に西九州を周遊し、紀行文“五足の靴”を執筆した与謝野鉄幹や北原白秋ら5名の詩人は、茂木港から富岡港へ船で渡り、島原・天草一揆の史跡を巡りつつ、雲仙岳や天草諸島の景観を鑑賞しました。

大正時代、中国から長崎を経て海路で雲仙岳西麓の小浜と天草へ伝わった“ちゃんぽん”は、各地で独自の進化を遂げ“日本三大ちゃんぽん”とも称され、本航路ゆかりの郷土食と言えます。

雲仙岳の様々な表情を探しながら、苓北観光汽船で旅してみませんか？

● 苓北観光汽船の情報はこちら ⇒ 苓北観光汽船株式会社 <http://www.reihoku-kisen.jp/>



航行する Kizuna II 号



早崎海峡から